

川口選手のサインのもらい方

竹内 亮介

名古屋東支部

平成18年6月27日入会



学生時代、12歳の少年ノブの家庭教師をしていた。彼はサッカーが大好きで、Jリーガーになりたいと毎日言っていた。ある日、ノブは、サッカー日本代表ゴールキーパーの川口能活選手のサインがどうしてもほしいのだが、なにか良いアイデアはないか、と僕に相談を持ちかけてきた。そのとき僕が何と答えたか、ついぞ思い出せないのだが、きっと思い出せない程度のアイデアしか提供できなかったのだろう。第一、当時川口選手は海外のクラブチームに所属していたから、なおさら無理に決まっていると思った。

ところが、1ヶ月ほどして、ノブはお目当てだった川口選手のサインを手に入れたのだ。驚いた僕は、どうやって手に入れたのかと尋ねた。するとノブは、得意げにこう答えた。

「カワグチの出身校の校長先生に、手紙を書いたんだ。『僕はサッカーが大好きで、カワグチさんみたいな選手になりたいです。だから、サインをくださいって頼んでくれませんか？』って」

手紙を受け取った校長は、彼の下手くそな字がおどる便箋の行間からただならぬ熱意を読み取ったのか、それとも少年の夢をかなえてやろうという至極まっとうな教育者的配慮を働かせたのか、はたまた単なる気まぐれからかは分からないが、とにかくノブが所望した品物を手配し、結果、ノブは僕が絶対に無理だと決め込んだことを、彼独自のイマジネーションをもってやってのけたのだ。

この事件から約10年経つが、仕事でやっかいな案件にあたったとき、解決不能と思われる問題に出くわしたときに、ノブのことがアタマをもたげることがある。

12歳の少年ノブに負けないぐらいのイマジネーションをもって、クリエイティブなサービスをお客様に提供できる司法書士になりたいと願ってやまない。